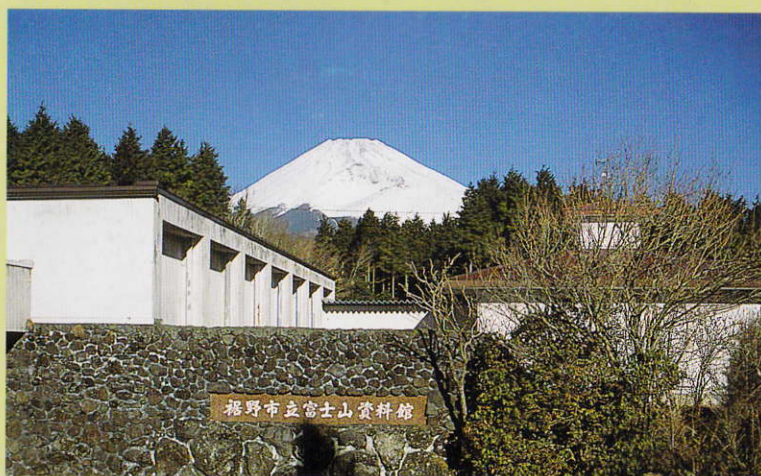


富士山

自然と歴史



富士山資料館

裾野市立富士山資料館

目 次

富士山からのメッセージ	1
地質時代の区分	2
富士山の構造 (おいたち)	3
山麓の水不足	6
富士五湖と樹海	7
富士山と植物	8
富士山と野鳥	10
富士山とシダ	12
神代杉と神代ひのき	13
富士山の火山洞窟	14
十里木の氷穴	15
洞窟と生物	16
富士山頂のレーダー	17
美しい富士山を描く	18
須山登山道の歴史	19
須山浅間神社の祭典	20
御師の果たした役割	21
富士山麓の資源をめぐる争い	22
宝永の大噴火	23
十里木街道の今昔	24
愛鷹山麓出土の古銭	25
古代人・富士山麓での生活	26
フジという言葉	27
活火山の富士山	28
笠雲と吊し雲	29
富士山の大きさ	30
登山道と合目	31
富士山はじめてづくし	32



霊峰富士

富士山からのメッセージ

人びとの心のなかに生きつづけている富士山の姿は、ととのった優美な美しさでしょう。

そのかげには、火を噴きあげ、地鳴りをともなって爆発しつづけたその誕生のドラマ、きびしい自然のなかでそこに生命をはぐくんだ動・植物、そして山裾に生きた人びとの知恵と努力など、ひたむきな歴史が刻みこまれています。

こうした視点からも富士山を理解し、そのゆたかな自然と、そこにいとなまれている社会を、ひとりひとりの力で支えてください。

かつての万葉の歌人、山部赤人がうたいあげた讃歌をくちずきみながら、富士山の大地を踏みしめましょう。

“語り継ぎ いい継ぎ行かむ ふじ たかね 不盡の高嶺は”

地球の歴史と富士山周辺の地史 を理解する地質時代の区分

地球の誕生 約46億年前

先カンブリア代	(～	約 6 億年前)
古 生 代	(約 6 億年	～	約 2 億年前)
中 生 代	(約 2 億年	～	約7000万年前)
新 生 代	(約7000万年前	～	現 在)

新生代の詳細

第三紀 { 古第三紀 (約7000万年 ～ 約2500万年前)
 { 新第三紀 (約2500万年 ～ 約 200万年前)

中新世 { 前 期 (2500万 ～ 2000万年前)
 { 中 期 (2000万 ～ 1300万年前)
 { 後 期 (1300万 ～ 700万年前)

鮮新世 (700万 ～ 1万年前)

第四紀 { 洪積世 (200万 ～ 1万年前)
 { 人類誕生の時代であり氷河時代でもあった。
 { 沖積世 (1万年前 ～ 現 在)
 { 現在の暖かい時代

富士山の構造 (おいたち)



富士山は日本でも数少ない玄武岩の火山です。玄武岩は、地下の深いところのマグマが噴きでたもので、安山岩や花崗岩よりも比重が重く、高温でやわらかく、鉄やカルシウムなどの成分を多くふくんだ溶岩です。

富士山は、何回も溶岩と火山灰の噴出をくりかえしてできた成層火山で、中央の噴火口のほかに山体の側面からも約70の噴火をしました。これを寄生火山とか、割目火山とよんでいます。

今の富士山は、小御岳火山という約70万年前に噴火した安山岩の火山と、約8万年から3万年前の間に噴火した古富士火山の上に、おおいかぶさるようにして約1万年から5千年前に出来た火山です。これを新富士火山とよびます。

新富士火山は、火山の歴史の中では若い火山であり、現在でも活動を続けている活火山といえます。

富士山は、小御岳、古富士、新富士山と三つの火山によって出来た複合火山です。

火山弾



紡錘形火山弾

火口付近におおく見られこぶし大以上の大きさの溶岩塊を火山弾といっています。

巨大な溶こう炉のような火口から、地球内部のマグマが空中に飛び出し固まったもので、流線型のものや、地面に落下した衝撃で色々な型が出来ます。代表的な火山弾にパン皮状火山弾、甘しょ形火山弾、紡錘形火山弾などがみられます。

溶岩樹型

火山の噴火によって1,000度にもおよぶ溶岩流が流れ出して、大きな樹木を溶岩がおし包みやがて冷えて固まりますが樹木は燃えてしまい、鑄型として残ったのが溶岩樹型です。写真左は立木をおし包んで出来た樹型。右は楼閣状の樹型で横倒しの大木のくさっている穴のなかへ溶岩が浸透して固まった溶岩樹型です。



溶岩樹型



溶岩樹型

溶岩球

固まった溶岩の破片が溶岩流の表面を、ころころところがる間にどろどろの溶岩が雪だるまのように付着して球状に成長したものや、火口近くの石が揺すられて火口に落ち再び持ち上げられて溶岩流の上をころがって出来た球状の岩を溶岩球といっています。



フォッサマグナ

日本列島が現在のかたちになったのは、約2500万年前の造山活動によるといわれています。海底が隆起して陸地ができあがりますが、これらの活動で日本列島の中央部に大きな溝ができます。この溝は駿河湾と新潟県糸魚川をむすぶ「フォッサマグナ」または大地溝帯とよんでいます。



化石

フォッサマグナとよばれるこの海峡の中に、海底火山の噴火物や、川がもちこんだ土砂がつまり、海の生物も土砂の中に閉じこめて、御坂層と名づけられる地層がたい積しました。

これが約1000万年前に少しずつ高くなって現在の富士山をとりまいている御坂山塊とその一連の山地をつつたのでクジラ、ウニ、貝、有孔虫等の化石が発掘されても不思議ではありません。



御坂層出土の化石

神縄断層

刃物で切られたように鋭くそがれたれき層、約100万年前に伊豆半島はフィリピン海プレートに乗り本州に衝突したといわれ本州にめりこんでいます。現在でも伊豆半島は北上を続け、丹沢山や赤石山脈を隆起させているといわれています。神縄断層は小山町生土に行くと見られます。



本州側 ← | → 伊豆半島側

神縄断層

山麓の水不足

富士山の表面は、溶岩流や火山灰でおおわれています。5000年前から3000年前までの溶岩流を中期溶岩流とよびますが、これらはあまり遠くまで流れついていません。もっとも新しい新期溶岩流は山頂よりも側面から多く噴出されました。溶岩流の上に土や砂はあまり積っていない新しい時代の溶岩流を丸尾とよんでいます。

数万年前に噴出した古富士火山が火山灰や火山弾などを高い熱で泥のようにして流した古富士泥流層は、十里木付近では地下175メートル、裾野市内の石脇で地下40メートルにあって地下水はこの泥流層の上を流れています。

ひび割れから溶岩は水を通しますが泥流層は水を通さないなのでこの二つの層の間を地下水が流れ白糸の滝や湧水をつくりだしているのです。

泥流層の厚い中腹部では深い井戸を掘る必要がありますが、それが出来ずに昔の人びとは飲み水に苦労しました。

火山灰層の下に泥流層に似て水を通しにくいマサとよばれる地層があることも悪い条件となっています。



溶岩で作った水だめ

分水升

富士五湖と樹海

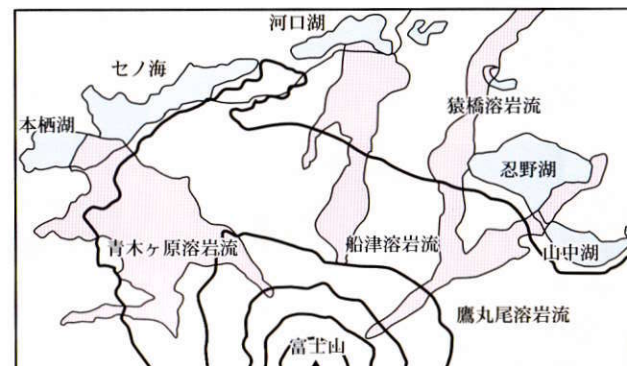
富士五湖は古富士や現在の富士山から何回も噴出した泥流や溶岩で、向かいの山々との間をせき止めて出来たため、火山せき止湖といわれています。

深さが125メートルもある本栖湖は、溶岩がせき止める前の断層運動によるものと思われます。この富士五湖の主な水源は、湖底の底から湧く伏流水ですから、富士山に降る雪や雨の量が湖の水位に大きく影響しています。

駿河湾から吹きあげられる湿度の高い暖かい空気が、青木ヶ原の上空で南アルプスをこえてくる冷たい乾燥した西風に冷やされて霧を発生させます。

この湿度の高さが溶岩流の上にツガ、ヒノキを中心とした樹木を繁らせ、切り倒すことを禁止されたおかげで緑の海のように見える美しい林が出来て樹海と名づけられました。

富士五湖のおいたち
800年ごろ



864年ごろ

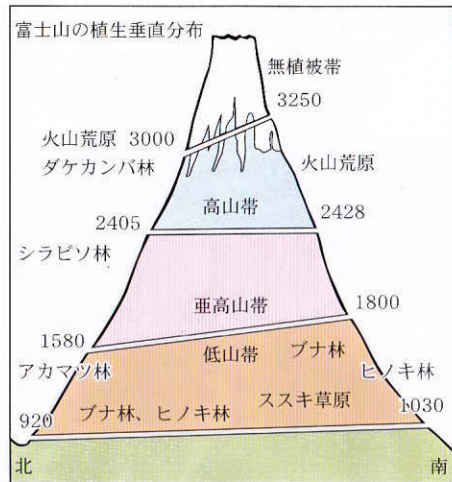


富士山と植物

富士山は成りたちの新しい火山ですから、他の高い山ほど高山植物の種類は多くありません。

また、その北側と南側とで植物の生育の仕方が変わっているのは、強い風や日照、激しい寒暖の差などの気象条件と、噴火による環境の違いが大きな原因といえるでしょう。

富士山の南東部は宝永噴火の爆裂によって、それ以前に生育していた植物が埋没して砂礫（砂と小石）地になってしまいましたが、植物の生育しにくいその砂礫地にフジアザミ、オンタデ、カリヤスモドキをはじめ幾種類もの植物が頂上めざして進出していく姿は、たくましい生命力を物語っています。



富士山の植生垂直分布図 (m)



サワヒヨドリ



シシウド



ヨメナ

富士山麓に咲く草花



マイヅルソウ



ヒメシャラ



マルバダケブキ



バイケイソウ



ヤハズヒゴタイ



オンタデ



コケモモ



ヒメシャジン

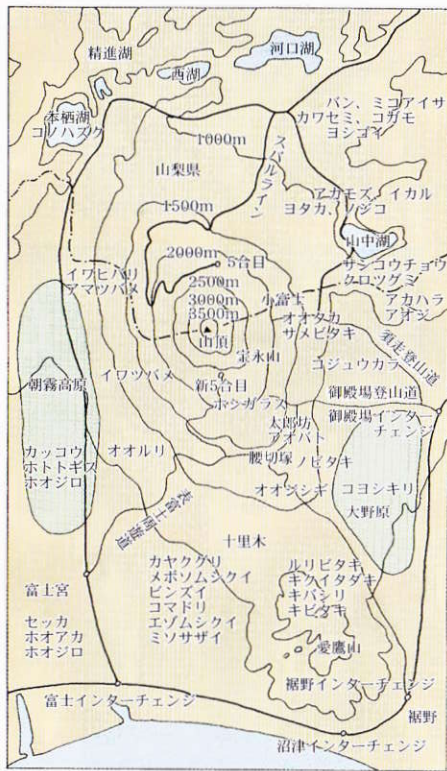
富士山と野鳥

森林と草原がひろがって、湖や沼の地帯へ、あるいは海へとつらなる、自然の変化にとんだ富士山麓は、ワシ、タカなどの猛禽（もうきん）類やヘビ類も少ない好条件がそろって、いままでに179種の鳥が観察され、そのうち100～105種がこの山麓で棲息するといわれています。

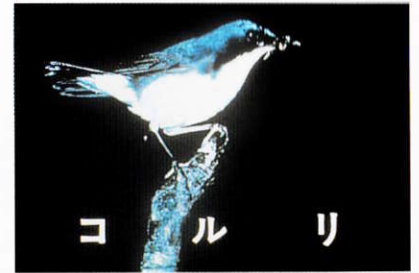
鳥たちは、植物と同じようにそれぞれの生活にあった高さで、好む植生をえらんで住んでいます。

このかけがえのない野鳥の宝庫を大切に守ってゆきたいものです。

富士山麓の野鳥の分布



富士山麓の野鳥



注) 鳥の生息はんいは、この図に限定されず、ある生息はんいをもっています。

図作成 高橋節蔵

富士山とシダ



イノデ



シシガシラ

花が咲いて種がふえる植物と違って、シダの仲間は主に葉のうらにつく胞子でふえますが、その分布は気温と降水量と湿度に大きな影響をうけるといわれています。

富士山とその付近は地形や気候の面から、寒帯、亜寒帯、温帯、暖帯に区分され、それぞれ要素をもつシダ植物が富士山とその周辺には入り乱れて生育している上に、この地域を北限（北の限界）・東限・南限とするシダがいくつか見られるのも特色のひとつです。さらにフジオシダをはじめ数種類のローカルタイプがあります。また、富士山の伏流水が各地に湧水するので、そのような環境を好むシダも多く、東駿河（富士川以東）地方で総計234種のシダ植物が確認されています。

「神代杉」と「神代ひのき」

昭和55年8月 富士山南麓の裾野市で出土した「神代（じんだい）ひのき」とよばれるヒノキの大木が平安時代前半の883年に立ち枯れたものであることが、奈良国立文化財研究所の年輪年代研究法による調査でわかりました。

平安時代前半まで存在した森林地帯が、富士山の火山活動などで消滅したらしいことがわかるなど、富士山を取り巻く自然環境を知る資料といえるでしょう。

この調査でこのヒノキは年輪の中心が西暦44年で、紀元前後に生長を始め、600年ごろから生長が鈍っていることがわかるといわれています。

富士山の火山活動に詳しい町田 洋氏は、平安時代に富士山からの溶岩が川をせき止めて池をつくり、樹木群を水没させた可能性があるかと推論しています。

また、箱根火山や愛鷹山などの樹木は集中豪雨の泥流に押し流されて、谷などに長い間地下で眠っている場合がよくあります。杉の「埋もれ木」はとくに「神代杉」とよばれています。



神代杉

出土場所 裾野市深良南堀
約1200年前に地中に埋まった。



神代ひのき

出土年月 昭和55年8月
出土場所 裾野市須山宇山口
全長 約5m 直径 約1.4m

富士山の火山洞窟

玄武火山で出来る洞窟には次の種類があります。

1) 溶岩洞窟

火山噴火時に噴出する溶岩流の中に出来る洞窟。

2) 複合樹型

溶岩流が樹木を包み、木の鋳型を造るのが樹型だが、数本の樹型が出来る時に、腐枯木が含まれている時に限り空洞部を造る。世界で富士山にしかありません。

3) Pit Cave (ピットケイブ)

スコリアを噴出する噴火口の底部に空洞を造る。日本にはありません。

4) Rift Cave (リフトケイブ)

割目噴火口の底部に空洞が出来る。富士山、三宅島、八丈島にあり、世界の大半が日本にあります。

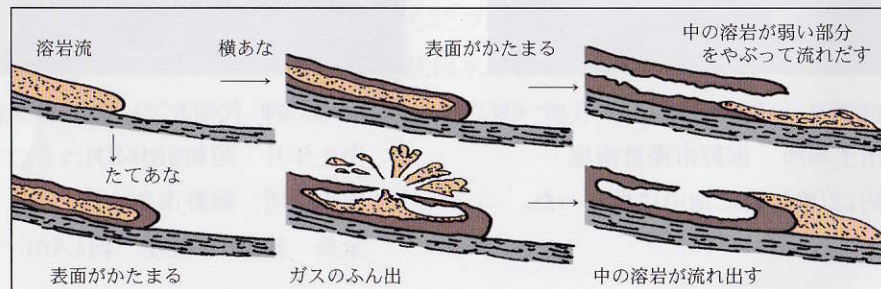


大野第2風穴 (溶岩洞窟)



大野第2風穴 溶岩鍾乳

溶岩トンネルのでき方

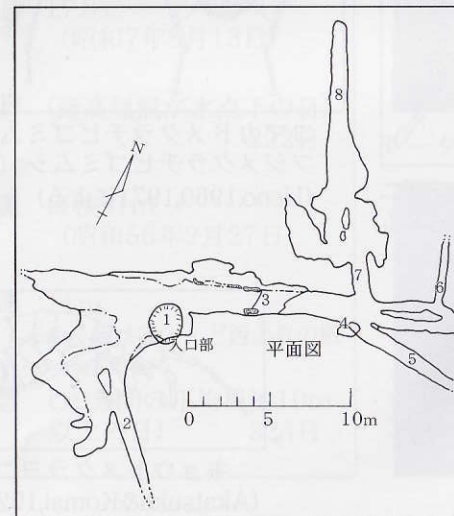


十里木の氷穴

7本の大木によって出来た複合溶岩樹型です。入口部の直径2.5メートルの大木を中心に、7本の木が結合して出来た樹型は、溶岩に押し倒されて巻き込まれた大木が運ばれ、入口部の大木は倒れず、巻き込まれてきた大木がひっかかり、木々の鋳型が結合して出来たものが、この複合溶岩樹型です。静岡県側で水のできる洞窟は十里木氷穴だけです。



十里木の氷穴



十里木氷穴

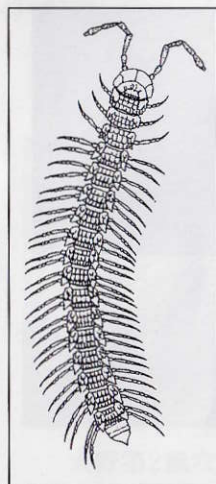
洞窟と生物

富士山の溶岩洞窟には、コウモリのような哺乳動物から、クモ、ヤスデ、トビムシ、ゴミムシ、カニムシ、ムカシヨコエビ等が生息しています。

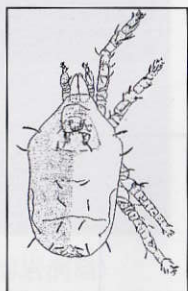
洞窟生物として、もっとも進んだ型のは目が退化してなくなり、手足が長くなり、身体の色も白くなったクモのように、洞窟内で生活していくために不必要な部分が退化し、必要な部分だけが発達していきます。

三島溶岩流の洞窟には、このような真洞窟性動物とよばれる生物が多くみられます。

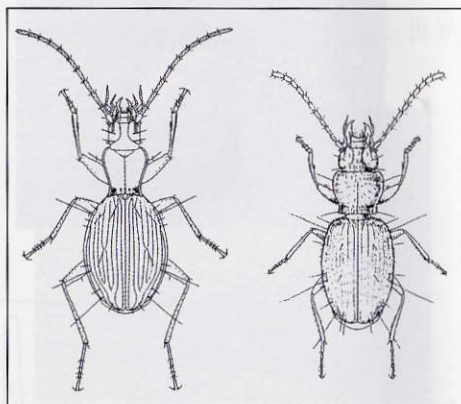
富士山の洞窟には、ほかの地方と違って日本海系と太平洋系の2種の系統の洞窟生物がまじりあって生息していて、世界でも例のない地域なのです。



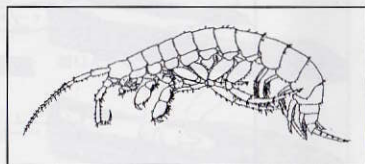
コマカドオビ
ヤスデ
(芳賀、1956による)



フジマンジダニ
(芝、1980による)



コマカドメクラチビゴミムシ (左)
フジメクラチビゴミムシ (右)
(Ueno, 1960, 1971による)



キョウトメクラヨコエビ
(Akatsuka&Komai, 1922による)

富士山頂のレーダー

標高3,776メートルの富士山頂での気象観測は、この付近をつぎつぎに通過する高・低気圧をはじめ各種の気象要素について、できるだけ精度の高い、しかも連続した記録が得られるので重要な役割をこなしていました。

山頂の測候所に設けられていた気象レーダーは、発射した電波が雨滴の集りや雪片（雪の結晶が寄りあわさったもの）などで反射され、ふたたび発射点まで帰ってくるのを受信して、その位置や大きさを知り、動きを追跡する装置です。

その監視できる範囲は水平距離にすると800キロメートルですから九州北部から北海道の南部上空までおよんでいました。

しかし、レーダードームの老朽化により施設の維持が困難となり、平成11年10月をもってその役割を終了し、翌年9月にドームが撤去されました。現在は山頂の気温・日照・風向・風速の観測が行われています。

山頂の気象記録

最低気温	マイナス38℃ (昭和56年2月27日)
最高気温	17.8℃ (昭和7年8月13日)
真冬日	(最高気温が氷点下の日) 222日
最大風速	毎秒91m (昭和56年2月27日)
平均風速	11m ふく風はほとんど西よりの風
暴風日数	(10分間の平均風速10m 以上の日) 324日



レーダードームを持つ富士山測候所



富士山測候所レーダー部

美しい富士山を描く

富士山の美しさは昔から人びとの心をとらえ、文学や絵画の題材としてすぐれた作品を生んでいます。



『快晴表富士』

画家 近藤 吾朗

昭和51年頃裾野市十里木に、アトリエを構え、富士山、大野原等を題材とした作品を紹介しています。昭和58年に富士山資料館に50号の大作「快晴表富士」を寄贈いただきました。



『夢』榎戸文彦

三島市出身 版画家 北山 敏

『富嶽「朝と夜」』はミクロの光景シリーズとして偏光顕微鏡によるミクロの世界を基本に、シルクスクリーンという新たな版画技法と熟練した色彩技術を駆使して創り上げた一連の作品の一つです。

富士山を描いた絵画で代表的なものは、北斎・広重の錦絵等、多くありますが、富士山資料館では、近藤吾朗、榎戸文彦、北上敏等の作品を収蔵し展示しています。

近代の美術や文学では、富士山のもつ山岳美を新しい手法でとらえ、富士山と人びとのふれあいを新しい角度から追求する試みが盛んになってきました。

須山登山道の歴史

鎌倉時代の正治2年（1200）の文書に富士山への登山道の一つとして珠山と記録され、文明18年（1486）には准后道興親王が、須山口を訪れたさいの和歌が『廻国雑記』にのっています。

この須山口登山道も宝永4年（1707）の大爆裂でとざされてしまい、72年後に宝永山の北側をまわる登山道として復興しました。その賑わいは寛政12年（1800）の5,398人という登山者数からも想像がつかます。

御殿場駅が、明治22年（1889）にでき、御殿場登山道が整備されると須山口はさびれてしまいましたが、昭和45年（1970）の表富士周遊道の開通によって三島駅を起点とする富士宮口五合目に通じる三島須山口登山道としてふたたび大きく浮かびあがりました。

また、平成9年には須山口登山道の復興を願う地元の方々の努力により、須山浅間神社を基点とした「須山口登山歩道」が整備されました。



須山村絵図 延享元年 甲子（1744）



道標 「左富士山道」

須山浅間神社の祭典

須山の浅間神社は柳沢の地に鎮座されており、木花之開耶姫命を祭神としています。集落とは沢を隔てた位置にあり、境内には杉の巨木が生い繁り静岡県神社庁御神木審査委員会より、御神木に指定されています。

富士山南口登山道として須山口が盛んに利用されていたときには、浅間神社は重要な役割をもち、登山者は必ず当社に参拝してから登山しています。

春祭り 4月16日（宵祭り）17日（本日）神輿渡御

祭典日 秋祭り 11月22日（宵祭り）23日（本日）

その他の年中行事に 元旦祭 大祓（大晦日）

祭典は上記の日を中心に、須山の皆さんによって古来からの伝統を守り行われています。



屋台



おみこし



稚児の舞



おはやし

御師の果たした役割

溶岩をすさまじく流しつづける富士山の噴火におどろいて、火の神の魂をしずめるためにまつたのが浅間神社のおこりで、のちの富士信仰の原点といえましょう。富士山へのぼり、祈願する風習がさかんになったのは、室町時代（1392-1573）からで、富士講として最も大勢の人を集めたのは、江戸時代（1590-1868）です。

登山道口にある浅間神社を中心にして、神社に集まる登山者の指導的な役割をはたしたのが御師とよばれる人で、神道についての知識をもち、京都吉田家の許可を得て御師の仕事を行っていました。

信者を宿泊させ、登山前の行事を指導した御師は須山でも12軒ありましたが、明治維新後にはその機能を失って姿を消してしまいました。



須山浅間神社



御師の免許状

御師の免許状とたすき

富士山須山口十二御師名（宝永7年）

渡辺 隼人	土屋平太夫
土屋伊太夫	土屋久太夫
土屋仙太夫	土屋半太夫
土屋新井太夫	杉山大官坊
杉山幸太夫	杉山長太夫
杉山三郎太夫	渡辺善太夫



御師のたすき

富士山麓の資源をめぐる争い

火山灰におおわれた富士山麓でのきびしい生活を支えてくれたものは広大な山林原野がもたらす資源ですから、集落の間でそれをめぐっての争いは数多くありました。領主は代官でなく、徳川幕府が直接裁きをおこなった富士山に関連した争いには、元禄15年(1702)甲、駿(山梨と静岡)の国境争いと、十里木が中心となった寛文9年(1669)の富士・駿東の群界争いがあります。

大野原がもたらす資源を近隣の人びとが共同で活用するならわしを確立したのも江戸時代のことですが、そのころの入会地についての史料をはじめ、近年の演習場についての記録のなかにも、時代の移りかわりとともに、その内容を変えながらも受けついでいかなければならない、山麓に生きる権利の歴史をみいだすことができます。



郡界を定めた古図

富士郡と駿東郡の郡界争い

安永8年(1779)幕府の裁許状の中に、寛文9年(1669)富士郡57箇村と駿東郡須山村境論絵図墨筋にては、御馬乗石、駒ヶ嶽を見通し、富士・駿東両郡境に付云々・・・とあります。

宝永の大噴火

歴史上に記録されている18回におよぶ富士山噴火のなかで、もっとも激しかったものは延暦19年(800)と貞観6年(864)の活動と、宝永の大噴火です。須山口四合目の付近が大爆裂した宝永4年(1707)の噴火は、頂上の火口より大きい3つの噴火口をいまなおとどめているほど大規模なもので、地元の家々は焼け石のために燃えあがり、田畑は焼け砂で埋まり、人びとは降りしきる砂のなかを逃げまどうありさまでした。

この宝永の大噴火は近世のことなので、さまざまな記録が残されていますがとくに御殿場市山之尻の名主が目撃しながら筆をとったという、宝永噴火の図や、須山口の御師で名主だった土屋伊太夫の筆記は当時の姿をよく描きだしています。



宝永噴火

宝永噴火の図

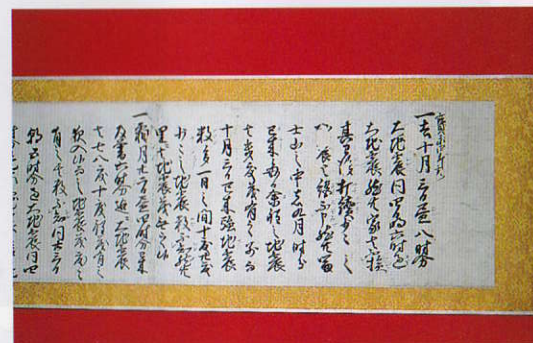
御殿場市 滝口家文書

宝永4年11月23日正午ごろバリバリッという大音響とともに、五合目付近の山腹から、火柱と噴煙が舞い上がったと伝えられています。

宝永噴火の記

裾野市 土屋家文書

宝永4年10月28日 東海道沖と南海道沖の二ヶ所を震源とするマグニチュード8.4という巨大地震が発生し、この地震が地下で富士山噴火の引き金となったと考えられています。噴火は16日間つづきました。



十里木街道の今昔

十里木街道は富士宮と箱根竹之下とを結んで足柄峠をこえる最も古い街道で、甲斐・駿河・相模の3ヶ国（山梨・静岡・神奈川の各県）をつなぐ重要な交通路でした。

十里木の地名は、富士宮へ5里、竹之下へ5里はなれているところからつけられたといわれ、富士山を常に横に見ながら通るため横走道ともよばれました。

富士郡から甲斐方面や御殿場方面へ物資を運ぶときには十里木街道がよく利用され、頼朝の富士の巻狩や、豊臣時代に京都大仏殿造営用の材木を運搬するさいにもここを通ったと伝えられています。由比から由比川をさかのぼり、大代峠をこえ有無瀬川ぞいに北松野にくだり、富士川を渡って富士宮から、この十里木越えをするのが東海道の一番古い道筋ともいわれています。

〔十里木関所跡〕 十里木村は寛文年間 御殿場市印野境「春木沢」に須山新田として居住していた村人を、寛文9年（1669）の富士郡と郡界争いが起ったさい、これを機会に延宝元年（1673）に現在の位置に移り住んだのが、起源とされています。

〔ニホンオオカミの頭骨〕 全国でも数えるほどしか残っていないニホンオオカミ純粋種の貴重な頭骨です。

この頭骨は、約150年ほど前十里木峠で当時富士郡勢子辻に住む川村銀兵衛によって退治されたものです。



十里木関所跡



ニホンオオカミと頭骨



愛鷹山麓出土の古銭

葛山から須山へつづく愛鷹山麓にそった旧道ぞいの今里の浄土院の東側、寺山とよばれる小高い山の裾から1,100枚の古銭が、昭和43年3月に発掘されました。日本の飛鳥時代にあたる唐のころつくられた開元通宝をはじめ中国から渡ってきた貨幣ばかりです。付近からは、5,000枚もの古銭が発見されたことがあります。

なぜ、ここに古銭が埋められていたのでしょうか。

- 1 富士登山道須山口にそっているの、銭を埋めて祈願する富士信仰の埋銭の風習によるものか。
- 2 富士登山に必要であった山役銭（登山料金）か。
- 3 浄土院にゆかりのある人が貨幣をまとめて埋めたものか。
- 4 流通しなくなった貨幣をまとめて埋めたものか。
- 5 鑄つぶして鉄砲の弾をつくらうとしたり、食料や武器を買入れようとしてたくわえておいた戦国武将の目的のための資金なのか。

など、さまざまなみかたがありますが、その決定は今後の研究にゆだねられています。



愛鷹山麓出土の古銭

古代人・富士山麓での生活

今からおよそ8~3万年前、活発だった古富士の火山活動による火山灰は、関東ローム層とよばれる赤土の層をかたちづくっています。そのころわたしたちの先祖は、旧石器文化をもった人びとが生活を送っている時代でした。

富士周辺では数少ない細石器文化とされている愛鷹山南麓の沼津休場遺跡付近の土層には、富士山の火山灰がつもっていて、山麓に住む古代人たちの生活に火の山富士が、きびしい試練をあたえていたことがしのべられます。

今からおよそ1万年前縄文時代の遺跡は、箱根や愛鷹山をはじめこの地方でも数多く発見されていますが、どれも富士山の眺望がすばらしく、古代人が単に狩りと木の実をとる生活の場として求めただけでなく、美しい神秘的な山として富士山をうやまい、おそれ仰ぎみていたのではないのでしょうか。



顔面把手付土器

裾野市桃園尾畑遺跡出土の、縄文時代中期の特徴を持った土器。

口縁部に人の顔を表現した飾りがほどこされている。



愛鷹山麓出土土偶

縄文時代の人々が、信仰の対象として作った人形で、写真はその頭部と考えられ顔にイレズミが、ほどこされている。

フジという言葉

富士山のフジという名前のおこりは、アイヌの人びとの言葉とされていました。ところが、藤・淵・縁とか、虹のことをフジという方言など、フジに関連した言葉から共通した意味を考え、さらにフジとつく日本各地の地名を調べた結果、それらのすべてが“急斜面する地形”をあらわしていることがわかりました。

したがって、富士山とは、“天宮にかかる美しいスロープ”にあたえられた昔の言葉であろう、と今日ではいわれています。

富士山のあて字に、不二・不尽・福慈などの文字を昔の人たちがつかっていることにも、その美しい山の姿にあこがれる心をうかがい知ることができます。

日本各地の富士山

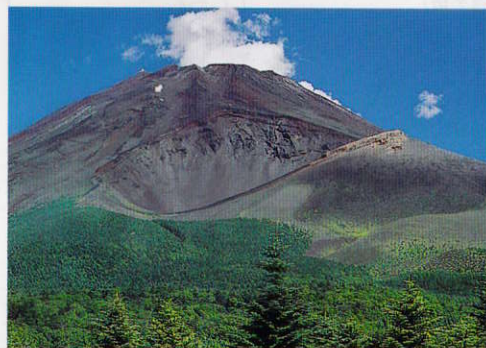


活火山の富士山

富士山の足もとにうづくまっているような愛鷹山や箱根山が数十万年にわたって複雑な火山活動をくりかえしてきたのに比較すると、富士山はまだ若い火山です。いまのところ富士山の真下のマグマ（地球内部の岩石が熱のためどろどろに溶けたもの）の変化は人体に感じず、表面上は静かです。

しかし、富士山は1083年から400年も活動を休止して1511年からは、ひんぱんに噴火をくりかえした例もあるので、宝永の噴火から約290年しかたっていない現在、いつかは噴火するおそれが十分あると考えるべきでしょう。

微小地震とはいえ富士山に関係した火山性地震が現在でも観測されていることから、富士山周辺の隆起やひずみなど火山活動にかかわりのある変化に心をくばる必要があります。

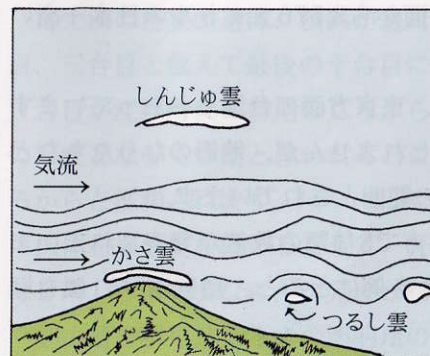


富士山
中央に残る宝永の噴火口



宝永噴火の図 沼津市土屋家文書

笠雲と吊し雲



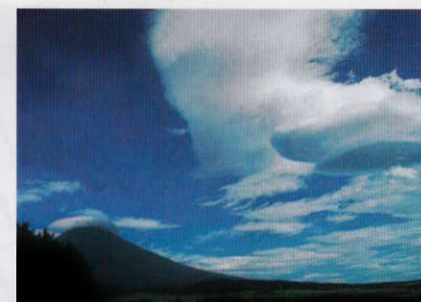
雲のでき方



レンズ雲



笠雲



吊し雲

富士山にベレー帽をかぶせたような笠雲は、気流が富士山をこえるとき暖かくしめっている空気が冷やされてできる雲で、上空に水蒸気が増してきていることをしめしています。

吊し雲は、上空の気流が強い風のため山体にそってはねあげられて、風下側で大きく波打つとき、レンズ形や鳥が翼をひろげたような形にできる雲です。

山麓の人びとは、笠雲や吊し雲から天気の変化をよみとりました。統計によると笠雲や吊し雲が現れてから24時間以内に山麓の天気が悪くなるのは、75パーセントぐらいの割合になります。

笠雲と吊し雲とが同時にあらわれるときは、必ずといってよいほど天気はくずれてしまいます。

富士山の大きさ

富士山は静岡県と山梨県にまたがり、海面から3,776メートルの日本一高い山です。

火山活動で富士山が噴きだした火山灰は、東京方面の台地もおおっていますから、東京も富士山の一部ともいえるかもしれませんが、地形のなりたちなどから一周153キロメートルの内側を富士山の範囲とされています。

海面の上からの富士山の体積は計算の仕方です3種類の数値が発表されていますが、そのひとつの1,397立方キロメートルを例にとると、琵琶湖が51個も埋められます

富士山をけずって静岡県に積みあげると高さが平均190メートル高くなり、東京23区に積みますと、2,389メートルも高くなります。

富士山の位置

位置 北緯35度21分5秒
東経138度45分1秒
(鹿児島県鹿児島市と
北海道旭川市から
900kmの距離)



富士山と琵琶湖の対比

高さ	3,776.2m
周囲	山頂 約3km ふもと153km
すそ野のさしわたし	東西39km 南北37km
側面積	19万100ha (大阪府より広い)
体積	1,397km ³ (琵琶湖の容積の51倍)
重さ	約1,000億t (20万tタンカーの50万隻分)

登山道と合目

富士山の各登山道は、傾斜が急になりはじめる地点を一合目として順に二合目、三合目と数えて最後の十合目にあたるところが頂上になっています。

合目が江戸時代の初期のころから活動する強力（荷物を運ぶ人）たちの仕事の目安となっていたと思われるところからも、何合目といういいかたはそのころからと推測されます。

山体を米や麦をはかるように一升とみなしてそれを十に分割したという説をはじめ、さまざまな考えが発表されていますが決定的なものはありません。

登山道を利用したときの照明用の燈油の消費量や、米粒を登山道に等分に落したときの量では、という説も、そのいわれをめぐる着想のひとつといえましょう。

「合」に区分した五つの説

- ① 富士山の形が穀聚山こくしゅうざんとって、まずに入った米を地上にあけた姿に似ているので、ます目を適用して1里（キロ）を1合としたというもの。
- ② 仏語の「劫」が「合」に誤って呼ばれるようになった。富士山に登る苦勞を人生の苦難にたとえて、その難度によって劫数、つまり合目を定めた。
- ③ 富士山の神体は木花之開耶姫命という女神で、女体を山に型取り、胎生十ヶ月を十合に分けた。十合の直前を胸つきと呼んでいることがその証拠。
- ④ 頂上を御鉢料といい、仏語では供米を御鉢料と呼ぶことから、米になぞって合で区分した。
- ⑤ 洪水の水量を測るにも昔は「九合何勺の出水」といった呼び方をしており、これを当てはめた。



一合目木立夜中之図 須山

富士山はじめてづくし

- ① 富士山についての最古の文献は！『常陸風土記』の靈龜元年（715）ごろ
- ② 歌によまれた最初は！『万葉集』奈良時代の末（～759）ごろ
- ③ 噴火についての最初の記録は！『続日本紀』の天応元年（781）
- ④ 山頂をくわしく描写した最古の文献は！
『富士山記』 都良香著 承和元年～元慶3年（834～879）
- ⑤ 物語に富士山があらわれる最初は！
『竹取りの翁物語』 貞観元～延喜元年（859～901）
- ⑥ 残っている最古の富士山の絵は！『一遍上人絵巻』円伊筆正安元年（1299）
- ⑦ 最古の登山体験記録は！『寺辺明鏡録』慶長13年（1608）
- ⑧ 富士山の洞窟調査の最初は！新田四郎忠常、建久3年6月3日『吾妻鏡』
- ⑨ 最初に登頂した外国人は！初代英国公使のオールコック、万延元年（1860）
- ⑩ 外国人女性による初登頂は！
2代目英国公使パークスの夫人、慶応3年（1867）
- ⑪ 外国の雑誌で紹介された最初は！
月刊誌『THE FAR EAST』
明治4年（1871）
- ⑫ 冬山登山の初記録は！
須山口から登頂したジェフリーズ
明治8年（1875）
- ⑬ 気象観測と重力測定 of 最初は！
須山口からのぼったメンデルホール
明治13年（1880）
- ⑭ スキーで初めて登山したのは！
八合目まで登ったレルヒ少佐と友人
クラッシュェル 明治44年（1911）
- ⑮ 山頂での長期気象観測の最初は！
野中至と妻千代子 明治28年10月
1日から12月21日 82日間



野中至と妻千代子

参考文献

- 1 富士山総合学術調査報告書
- 2 講談社カラー科学大図鑑
富士山
- 3 富士山 歴史と風土と人と
中日新聞静岡支局編

富士山

自然と歴史

発行 平成5年3月
改訂 平成15年3月

裾野市立富士山資料館
〒410-1231

裾野市須山2255の39

名誉館長 渡辺徳逸

館長 川口勝弘

学芸員 井上輝夫

渡辺節代

野田清美

印刷 大和印刷株式会社